

極秘指令



李
佳

Li Jia



僕の目に映ったのは・・・

あの公安のヤツがいた。

要は、この飛行機の中は、

警察の公安畑と

刑事畑の対峙する場所となり、

莉莉を挟んで両軍が睨み合っている。

僕は森田省吾という偽名を使い、

莉莉に接近した刑事である。

今回SPの任務を終え、

すぐに辞令の交付式が行われ、

彼女と別れることとなる。



極秘指令



李佳

Li Jia



ブックウェイ

目次

プロローグ	7
第一章 哲婦の挽歌	19
第二章 火刑台上の聖女	73
第三章 長官の黒い影	129
第四章 魔の協奏曲	193
第五章 消えた向日葵	228
エピローグ	251

装
幀

2
D
A
Y

極秘指令

プロローグ

二〇一七年六月十四日午後一時五分、JAL那覇空港行きの一七便が羽田空港を離陸すると、アナウンスが何度も繰り返された。

「那覇市の天候は、雷警報が出ており、状況により、羽田空港に引き返す可能性があります。乗客の皆様のご理解とご協力のほどよろしくお願いいたします」

「雷だけで、引き返す？」莉莉の表情が陰しくなった。

「二十数年間も那覇に住んでいたのに、雷なんか殆どなかったよ。クソッ！」

羽田空港の待合室に着いた時に、天候に関するアナウンスが聞こえた。

僕は上層部からの命令で「森田省吾」という偽名と経歴を詐称し、婚活していた莉莉に接近し、交際を始めた刑事だ。

今回は、彼女の希望で、ボディガードとして、那覇の裁判所に付き添うことになった。

県警本部には「彼女の恋人」ということにして、那覇の裁判所に同行することへの了承を得た。

「民事裁判の場合、私が出廷しないと、元夫の訴えが通ってしまふ。離婚訴訟で完敗したうえに、私の最後の財産である4LDKの住戸まで、八十二万円という激安の金額で買い取ら

れちゃう」

その裁判は、二〇一三年十二月四日に、彼女が養育費の取立と離婚訴訟が那覇家裁で平行に進行し、終結に向っていた矢先に、大きな出来事があった。その数カ月前から、特定秘密保護法案が国会に提出され、法曹界を始め、反対と批判の声が上がる中、強行採決されたのだ。

特定秘密の漏えい等に対する罰則があり、徹底した箝口令が敷かれているため、公務員である僕は、その秘密を取得するわけにはいかない。

しかし、莉莉は、特定秘密保護法が成立する数年前から、自身が書いたブログ記事に養育費の指定銀行口座が変造されたことなど事件性のある内容を証拠と共にウェブサイトに載せただけでなく、一般の市民からも那覇家裁の不正操作や証拠改ざんなどの情報が寄せられたので、捜査の目は自然に彼女の被害状況に向き、密かに裁判所職員の非行に、公訴の提起に向け、神経を尖がらせていた。

加えて、彼女の離婚訴訟の期日が既に決まったのに、強引にさいたま家裁から那覇家裁に移送された際、その経緯や証拠なども詳しく彼女のブログに載せてあったので、僕らの仕事上、その犯罪事実を無視することはできない。

それらの事から、彼女が今までたくさん被害を受けたことを分かっているながら、この保護法がスピーディーに成立した関係で、僕らは、その違法行為にも異議申し立てをすること

ができなくなってしまった。

最悪の状態に置かれた彼女は、離婚が成立した後も、裁判が続き、元夫との間で最後の裁判が終結する直前に、不思議なことに、またまた与党がテロ等準備罪（共謀罪）の成立を急いでいた。

僕は、今朝羽田空港に向かう前に、「飛行機を羽田空港に引き返す」という指示を受けていた。事の深刻さと緊急性を感じ取った。

僕は莉莉を慰めるように声を掛けた。

「天候が悪いから仕方がないね」

「おかしいと思わない？ 単なる雷の問題なら、その上空を避ければいいと思う。昔パイロット訓練学校によく出入りしていたから、それくらい大丈夫だってことは分かる」

「でも危ないからね」

「乗客全員を雷ぐらいで、羽田空港に戻すなんて、みんな怒らないと思う？」

僕は、黙っていた。

この飛行機に乗っている乗客は、実は、殆ど警察官のようだ。

搭乗ゲートから飛行機の座席に着くまで、異様な光景をキャッチした。マスクと帽子を着用し、サングラスをかけている者が二、三人もいた。また、数名の仲間が搭乗していることにも気付いた。更にはつきりと僕の目に映ったのは、公安の刑事だった。ヤツとは、S署に

勤務していた頃、莉莉のことで激しい口論になったことがあり、鮮明に覚えている。

「俺が彼女の世話をするから、刑事達は全員引いてくれ。いいな、何があっても、彼女に被害届を絶対に出させないこと。文句も一切受け付けないように」

莉莉が北千住に引っ越して間もない頃、メールフレンドにラブホテルに連れて行かれ、ヌード写真を無理やりに撮られたことで、署に相談したところ、アイツが突然署に現れたのだ。

「チョウカンからの命令だ。彼女のことを『嘘つき』、『不倫女』、そして、『マルセイ』（警察の隠語で精神異常者を意味する）にしろ！ 沖繩の公安から送ってきた情報によるものだ」
あの公安警察は、その後ずっと莉莉の担当になり、彼女のことをしつこく追い詰め、どんな残虐な手段でも使うヤツだそうだ。莉莉から、幾度となく被害相談があり、捜査したが、後ほど判明したのは、いずれもヤツがでっち上げた犯行だったと仲間から聞いた。無実の莉莉が凶悪犯に仕立て上げられ、国家の治安維持という観点から規制の対象となり、我らのチームでは、上からの命令があったため、何も助けることができないことに悔しい思いをさせられた。

今、この飛行機の中に、公安のアイツ以外にも、僕らの座席番号3Cと3D周りに座っている男達は、体型から目つきまで、警察官だろう。要は、この飛行機の中は、警察の公安畑と刑事畑の対峙する場所となり、莉莉を挟んで、両軍が睨み合っている。

最近、日比谷公園で連日共謀罪の成立に反対するデモが開かれ、日本各地で抗議行動が起きている。

車で羽田空港に向いながら、テレビの画面では、この法律の採決に関するニュースばかりが映っている。野党は徹底的に反対し、内閣不信任決議案を提出する意向も報じられた。

牛歩戦術という抵抗手段は、もう使えないのか……：どうにか廃案にならないものか、とハラハラしていた。

離陸態勢が落ち着き、シートベルトを外してもいいランプがついたところ、莉莉は速足で前方に立っている客室乗務員に向かった。

「すみません。この飛行機が引き返された場合、他の便へ優先的に乗せてもらえないでしょうか」

そして、彼女は相談事を他人に聞かれないように、客室乗務員と一緒にカーテンの内側に入ってしまったが、しばらくしてから、席に戻ってきた。

「羽田空港に引き返しても、次の飛行機の空席を優先的に用意できないと言われた。酷くない？ 裁判所の呼出状を持っていると言ったのに」

「他の乗客もいるからね」

「那覇の裁判所は、完全に大物政治家の圧力がかったと思うわ。不動産物件の評価額を不

動産鑑定士に働きかけ、那覇市役所に交付された固定資産評価証明書に書かれている評価額の三分の一の金額にしか設定させない。そのうえ、この飛行機を出発地点の羽田空港に引き返させ、裁判所が私の言い分を聞くことができないうように仕組んで、私の最後の財産を元夫にあげるといふことだね」

——いや、お前は那覇の裁判所に行ったら、その場で連行され、逮捕されるぞ！ 今ちようど共謀罪の強行採決を防ぐため、世論が沸騰しているじゃないか。お前は頭が単純過ぎるなあ——小声でつぶやきながらも、僕は、その事実を告げることができない。しかし、彼女は、依然として、これから更に険しい道に追い込まれることに気づかない様子だ。

やがて、チーフリーダーのような客室乗務員が莉莉の席に向かってきた。

「お客様、那覇空港に着陸するかどうかは、機長の判断なので、もう暫くお待ちください」
「できるなら、引き返さないでほしい。私の最後の財産だから、元夫に奪われたくないの」
莉莉は周りの人が聞いているかどうかは、もう構う余裕がなくなったように、怒りを含んだ声で訴えた。

「分かりました。ですが、那覇空港に着陸するかどうかは保証される訳ではありませんので、予めご了承ください」

莉莉が大きな溜息をし、両手で頭を強く押さえた。

——おいおい、それより逮捕されるのがまずいぞ！ 財産はどうでもいいんじゃないか——

と僕は心の中で叫んだ。

客室乗務員が心配そうに、再び莉莉に聞いた。

「お一人ですか」

「いいえ、SPがついています」

莉莉は、冗談のように僕を指さした。

「分かりました。もう一度機長に相談しますね」

この二時間半のフライトの後に、どんな運命が待ち受けているのか、誰も知らない。

「今回の不動産は、元夫と婚姻関係のない時に、妹から四百万円を借りて購入した物件なのに、離婚訴訟の判決では、裁判官がそれを貢献度のない元夫に財産分与してしまった。更に、生活費を一円も私に与えない元夫を裁判官が助けた。困窮していた私達親子三人は、その物件から得るわずかな家賃収入を生活費用に当てていたのに、養育費の債務を果たさない元夫に、裁判所は、家賃収入を債務名義の弁済資金に充当させ、元夫からもらうべき債権と相殺したのよ。言い換えれば、我らが食べたご飯を吐き出させ、生活費を渡さない元夫に、私の家賃収入をよこせということなの」

「異常だね」

「実は、この賃貸物件の購入代金は彼が全然出していないのに、私がもらうべき敷金、礼金と最初の家賃は、彼に着服された。なのに、裁判官は彼に対し、返還命令を発しなかった」

「こんな判例もあるんだね」

「その物件の購入にあてたお金は妹が出資したのに、私と婚姻関係がなかったあの男が財産を分けられるなんて、気持ちが悪くない？ それも優秀なエリート裁判官が平気で下した判決だよ」

「ふざけてるね」

「出資せず利益ばかり奪った元夫は、妹が出資してくれた六百四十万円の中の四百万円を購入代金に充てて、まだ妹に返済してもいないのに、八十二万円という金額でそれを買取りろうとしているのよ」

「欲張りで、卑劣な奴だな」

「一回目に結婚したとき、現金で彼に渡して買ったマンションの住戸や土地は、彼が勝手に自分の名義で登記し、私が朝から晩までフルタイムで働き、すべての家事労働も一人でこなしたのに、元夫から何の財産分与も受けなかった」

「彼と二回も結婚したんだね」

「しかも最悪なのは、家にもっと多くの現金が使えるようにしたいと、自分の厚生年金の保険料を節約したから、老後の生活に何の保証もキープしなかったの。今回離婚の際、受けられる年金の分割は、二回目の婚姻期間しかカウントされなかった」

「子供達の親権者になっている彼の代わりに、離婚中も、君は長男を引き取って、生活をみ

たし、彼と子供達のために、頑張ったよね」

「裁判所は何故、彼の債務不履行に何の責任追及もしないで、私の権利や財産ばかりを奪って、彼に与えるのか、理解できない」

かつての婚姻生活で、彼女は確かに一生懸命に頑張った。その意味で、今回は、彼女が再び不利益な立場に立たされたことに、何とか挽回しようとした。

民事の問題だと思えるが、莉莉が面したトラブルは、相当に厄介な刑事事件と関わっている。

僕がS署に勤めて、莉莉のことを知ってから、ちょうど十二年が経つ。その後、彼女が埼玉県に引越し、僕も彼女の転居先の管轄であるK署に三年間勤務した。その後、数年間近畿地方を転々としたが、去年再びK署を所轄する埼玉県警の警察本部に転勤した。

公安警察に追われていることを知らない莉莉は、県警の公安委員会に苦情申出書を数多く出した。彼女のことをどう対応するのか、県警本部も頭を抱えているようだ。結局、その都度公安委員会ができることは、ただただ彼女に頭を深く下げることだけだった。

かなり長い歳月が流れ、莉莉は依然として魅力的だが、相当に老けてしまっ、時々放心したような顔をしていることが見受けられる。

三十年間の婚姻生活に力を尽くしてきたが、不条理にさらされてしまった。彼女は、むしろ不運かつ悲運な女で、自由を拘束され、大事な長男を失ってしまったことで、精神的にも

肉体的にも取返しのないダメージを受けたと思う。

今回の旅で彼女は、「自分一人で那覇に向うのが怖い……宿泊するホテルで、沖縄県警か誰かに暗殺されるかもしれない」と言い、出発する数日前に、僕に一つ小さなUSBメモリを渡した。

「今まで私を付け回してきた変な警察グループが、執拗に私の悪口を勤務先に言いふらし、更に通っていた台湾の仏教団体と私の故郷にまで誹謗中傷を振りまいた。『悪女』というイメージで仕立てられ、誤解されたまま死ぬと、私のお墓まで石を投げに来る人があると思う。万が一、今回の旅先で事件や事故に遭遇した場合、どうかこの中に保存している小説を出版してください。真犯人は誰なのか、何故私を死の窮地に追い込むのか。徹底的に追求してください。すべての謎は、このメモリの中に書いてあるから」

長い年月の戦い、莉莉が疲れ切った様子で、すべての苦難をあのUSBに託したように、僕にそれを渡すと、「はっ」と息を吐き、安心したような顔をした。

「警察は私を外国人妻扱いにして、私の労働権と裁判する権利を巧妙に奪った。そして、被害を出させてくれない。被害を訴えれば訴えるほど、更なる被害を受けてしまう。私は酷い目に遭ったことと、長男の無駄な犠牲には異議があったことで、どうしても出版して、世の中に伝えたい」

「どんなことが書いてあるの？」

「今までどんな事件があったのか、ミステリー小説の形で書いてみたわ。あり得ないことばかり起こったから、犯人の動機は単なる私への仕返しと、私の生命力はどれ程あるのか試したいだけと思うけど、誰が、どんなトリックを使って犯行に及んだのかを、ストーリーを中心に書いたの。それから、直近の事件から謎を提示し、時系列と逆の方向に遡って、過去の出来事に巻き戻し、事件の真相を探り、犯人を当ててもらおうと思ったの」

一見、天然ボケだと思われるが、彼女は実に頭が良さそうだ。

そのUSBメモリの内容は刑事の仕事の一環として、読む必要があるもので、プリントアウトし、上司にも渡した。

それが原因なのか、今日の機内は、意外な任務を持たされているような緊張感が漂っていた。

かなり長い時間が経ち、ようやく機長のアナウンスが聞こえた。

「ただいま着陸の態勢に入りました。シートベルトの着用をお願いします」

莉莉は、興奮のあまり手をあげ、僕にハイタッチのポーズを求めた。僕は仕方がなく応じたが、嬉しい気持ちではなかった。

それというのも、この飛行機が着陸した後、彼女の運命はどの方向に向かっているのか、

まだまだ読めないことがいっぱいあるからだった。

第一章 哲婦の挽歌

1

「人間が死んでしまったら、財産なんかお墓に持っていけるわけではない。だから悪いことをせず、欲張りもしない」という教義を、小さい時から敬虔な仏教徒である養父に教え込まれた。

台湾を去って、あれから三十年が経った。

配偶者ビザを取得するため、台北の裁判所で、裁判官立会いの下で大浜信介と結婚した。私達夫婦は、一度離婚し、再婚復縁したのに、再び別居十年が経過したところで、那覇家庭裁判所にて、裁判官の判決により再び離婚した。

自分の幸せを後回しにして、一回目の婚姻期間に、元夫の信介に現金を渡し、マンションと土地を買ったが、いずれも彼の名義で登記され、私には、わずかな財産分与の権利を得ることもできなかった。

絶対に台湾に戻らないという切ない過去があり、那覇を私の永遠の故郷にすると決心し、

息子憲一の誕生をきっかけに、給料の安い信介を助け、普通の専業主婦より二、三倍も働いて来た。

しかし、セックスレスに耐えきった最後のエンペラー溥儀の傍に寝ていた夫人と同じように、燃えた妻の願望に合わせられない信介だったが、実は大の女好きだった。

苦しい家計の中から、簿記学院に通い、三級から一級コースという通学期間の中で、彼は授業が終わると、家に残した独りぼっちの外国人妻と幼い長男のために帰宅するでもなく、同じクラスで勉強している女性とデートしていたことを、仕事関係で偶然に知り合った人から聞いた。

「私も大浜と同じクラスで簿記を勉強したよ」

彼女は、私が大浜莉莉という名刺を差し出したと同時に、大きな歓声をあげ、驚いた様子だった。

沖繩は本当に小さい島で、いくつかのインフォメーションを上げれば、すぐに私の身分が明かされる。しかし、彼女が提供してくれたこの悲しい情報は、ほぼ性的不能だった夫に愛情を持って我慢し、上手に誘導して治してやったにもかかわらず、夫は他所の女に捧げているのでは堪らない。最後のエンペラーは、最終的に、皇后に狂った人生を送らせ、皇后のその苦しい歩みは、私には十分に想像でき、理解ができる。

長い家庭内離婚の年月が流れ、息子達のため、一回目の離婚が成立するまでに、二回も那

覇家裁で調停してもらい、平成十一年九月に、とうとう信介と調停離婚をした。

毎回の離婚調停申立書に書き込んだ理由は、一度も変更したことがない。夫は、生活費を渡さず、性的にも不能。妻に対する精神的な虐待……という項目しか思いつかない。

息子の憲一が一人っ子では可哀想だと、頑張って作った弟の英司の親権も信介に奪われた。憲一が高校一年生の時だった。

離婚後も、信介の仕事に影響が出ないように、夕方は必ず元の家に戻り、息子達のために夕食を用意した。しかし、同じく晩ご飯を作るために、一旦家に戻ってきた信介と鉢合わせしてしまった。彼は子供達の心理を配慮せず、大声で、乱暴に私を追い払った。そんな姿を、何度も息子達の目に映す訳にはいかないと判断し、沖縄を出ることにした。

2

妹がロサンゼルスに永住している関係もあり、大学時代の友人の紹介でお見合いをし、再婚したのを機に、米国に渡ることとなった。再婚相手は、日本大手航空会社の孫会社の副社長に当たる人物で、アメリカの市民権を持ち、名前はロバート藤本という。

ベーカーズフィールドには会社から支給された3LDKの寮にも、トールンス市にある敷地二百坪を有する自宅にも、前庭と裏庭とも広い芝生で覆われ、垣根は豪壮な佇まいのエメ

ラルドグリーンのコニファーで囲まれ、円錐形の樹形に整えられている。庭師が定期的に入れをしてくれるから、アメリカ人夫婦のように自分で重い機械を押しながら、草刈りなどの仕事をしなくて良い。

お昼は、二人ともパイロット訓練学校の食堂を利用し、夜は和食か中華料理のレストランで晩ご飯を食べたりして、時にはイタリアンのレストランで一食に三百ドルも費やし、ウェイターの代わりにお店のマネージャーさん自ら料理を運ぶ役をしてくれたことがある。

当然、外食の大半はロバートが決め、会社の経費で賄い、私はまったく食事の支度をする必要がなかった。

「二人だけの幸せに乾杯！」彼が望んでいるのは、ラブラブでロマンチックな夫婦生活だ。

「お前は最高の女だ！」と言ってくれた。

「お前は、ベッドで待ってればいい」日本国内では、大概良妻賢母を期待することに違いないが、彼の考え方と価値観は、日本人でありながらも日本式ではない。

週末になると、二人はセレブが集まるゴルフ場に通う。

日本大手企業台北事務所時代の上司は「沖縄のボーイフレンドとは結婚するな」と言い、社内結婚を斡旋してくれたりと心配してくれたものだが、彼も私が大手航空会社の人と再婚したことを喜んでくれた。

「良かったじゃないか。莉莉は、そもそも優雅な生活を送るべき人だから。今度、ロサンゼ

ルスへ遊びに行くよ」

不幸の中でも、自分の幸せをやっと掴んだと思った矢先に、元夫の信介は、息子の憲一が不登校になってしている事実を、私の新しい家庭に持ち込んだ。

「憲一のこと、俺が全然働けない」

「私だって、働くか、夫に養ってもらうか、でないとやっていけないでしょう。あなたが子供の面倒をみると言ったから、私は何も請求せずに任せたのよ」

本来親権者である信介が、全責任を負わなくてはいけないものを、平気で遠く米国で生活を送っている私に丸投げして、長男の世話役を強いた。

そうとは言え、私の大好きな息子だから、心を痛めた。憲一の様子を見るために、いったん那覇に戻った。

3

将来は体育大学に行きたいと言っていたあんなに腕白だった長男は、相当に痩せてしまつて、目の輝きも失せていた。

親戚も友人もない沖縄では、長男も私も互いにとって、唯一の親友とも言えるような存在だった。しかし、私が急に沖縄から消えたことが原因なのか、いつも笑顔を見せていた少

年から、笑顔と元気は消えていた。

親子との会話を深めるため、鹿児島県の指宿温泉に連れていこうと旅に出た。

それから那覇に戻ったとき、憲一は信介の前で、私に跪びいて「お母さん、アメリカに連れて行って」と懇願した。

その言葉は堪らない！ 私は、結局、ごく普通の母親に過ぎない。

「分かった。アメリカに戻ったら、その準備をするよ」

憲一の肩を強く抱きながら、大きな心配事も脳内に浮かんだ。

「一生懸命に勉強することを約束してね。憲一を守るため、お母さんはまた離婚してしまう可能性がある。アメリカの大学を卒業し、立派な仕事をみつけて、お母さんを養うのよ」

どう見ても弱々しい憲一は、自信がなさそうに、指を信介に向けてさした。

信介は、息子が送ってきた合図をキャッチしたのか。

「お父さんは、お母さんの面倒をみるよ。心配しなくていい」

憲一の顔に、嬉しそうな表情が戻った。私の生活費は、信介に請求するつもりはなかったが、憲一的生活費や家賃と雑費などの支出があり、毎月十万円を振り込むように約束してもらった。

それから、長男を米国の高校に入れる準備に取り掛かった。

平成十三年の一月、憲一をロサンゼルス国際空港で迎えた。再婚した夫のロバートは、空港に着くと、ロサンゼルス空港の支店長が必ず傍で付き添うほどのVIP人物である。

パイロット訓練学校の教官人事を握り、航空会社のナンバーワンとナンバーツーとしかお付き合えない彼にとって、この不登校の義理の息子は何かの嫌悪感を与えたのか、私達親子が合流するまで、彼はずっと遠い所から見つめていた。私の夫とは言え、憲一のことでは気を遣っていたようだ。

「息子の負担を貴方には掛けさせたくないし、家賃も支払うよ」

憲一が来る前に、ロバートに相談しておいたが、何故か彼は急に気が変わった様子だった。「何で来たの？」

トランスの自宅に戻り、憲一とお部屋で話をした時に、ロバートは私を外に呼び出した。

「シー」と私が指を唇に当て、「息子に聞かれたら良くないよ」

「僕は憲一の世話をしたくないんだ」

「息子の出費は全部私が負担するから……あなたに迷惑を掛けるつもりはないわ」

「いや、僕は遠慮するよ。これから毎週の週末はトールランスの家に戻るけど、平日は一人で
バーカースフィールドにいるよ」

冷え切った夫婦関係を憲一が敏感に察知したようだ。

数日後、高校の先生から電話が掛かった。

「お母さん、早く学校に来てください。緊急事態です。お母さんが来ないと救急車が出発で
きません」

「どうしたんですか」

「息子さんが睡眠薬を大量に飲んだそうです」

私は急いで車を発進し、学校に向かった。それから救急車の後を追いつ、長男と一緒に病院
に入った。救急室での処置が終わり、憲一の手を握ってみたが、冷たかった。

「もう大丈夫ですよ。しばらく付き添ってあげてください。落ち着いたら、入院病棟に移り
ます」

「えっ、入院？」

「アメリカでは、自殺未遂の人は、全員強制入院になります」

入院の手続きをしている真つ最中に、私の携帯電話が不意に鳴った。

「ロバートの弁護士です」

「どんな御用でしょうか」

「ロバートはロサンゼルスに、あなたのお子様の退去を求める訴訟を起こした」
「私は出廷しませんよ。勝手に裁判を起こしてください。息子は自殺未遂を計ったため、今から入院します」

よりにもよってこんな時に……夫には本当に人間性があるのか。ロバートの意外な行動に呆れ、手に持っていた携帯電話が潰れるぐらい、怒りでグッと握りしめた。

夫であるロバートの世話をして、自分が楽な生活を求めるのか。大事な息子の将来を考え、助けるのか。その選択肢には全然迷いがなかった。

憲一が退院後、私は毅然とロバートの家を出た。荷物をまとめ、憲一を連れ、モーター（自動車ホテル）を仮住まいにして、妹のクレジットスコアを使い、妹の名義でローンを組み、一カ月後、トールランスビーチに近い、海が見えるコンドミニアムを購入した。駐車スペースは二台分も確保したため、憲一が成人になって運転免許を取得したら使える。

法廷の訴訟を含め、ロバートとの離婚裁判は、弁護士に任せた。親子二人の新しい生活をスタートさせるため、憲一と一緒にホームセンターへ行き、必要な物を調達したり、家具を購入したりしていた。

家を購入したのは、ロサンゼルスの高い家賃を避けるための対策だけで、私は決して大金持ちではない。頭金の五百万円は、その全額を妹が出してくれた。残りの住宅ローンは、私が支払うことになる。

生活防衛資金を蓄えておかないといけないのに、憲一とモーターに仮住まいをして以来、家具の購入や支払った弁護士費用を差し引くと、実は、手元にはわずか百万円ぐらいのお金しか残らない。毎月、住宅ローンの返済をしなくてはいけないので、信介の送金は私と長男の生死に関わっているような重要な財源となっている。

そもそも、忘れてはいけないのは、信介は憲一の親権者だ。彼が子供達の親権をどうしてもゲットしたいということで、私は彼に対し、なんの財産分与も請求しなかったのに、今、私は独りぼっちで長男の世話をしなくてはいけない。

ロバートの家を出る前に、すでに憲一を公立高校サウス・ハイ・スクールに入学させた。通学に便利なように、学校を挟んで、ロバートの家と反対側のトールンスビーチに住居を構えた。

アメリカの永住権は、ロバートと結婚した後、僅か三週間で取得した。私はグリーンカードを所持しているため、日本のパスポートを持つ憲一は三カ月の滞在期間が過ぎても、永住権を持つ母親と同居しているので、アメリカの法律では、未成年の子に対し、入学の拒否をすることができない。

英語力測定テストの結果、憲一は英語学習者のクラスに入り、様々な国籍の外国人生徒と一緒に集中的に英語を学ぶこととなった。

ロバートに頼ってきた生活の基盤を急に失い、近いうちにロサンゼルスで就職先をみつけ